

# 校長だより

福津市立福間東中学校  
校長 猪股 清貴  
平成 29 年 3 月 17 日 No62

## 1 年生百人一首に親しむ



今年も1年生の百人一首大会が行われました。1年生の古典学習では「古典独特のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること」が学習内容として示されています。百人一首に触れることで、歴史的仮名遣いの読みや和歌の音読のリズムを身に付けることができます。また、競技としての面白さもあり生徒たちは真剣に取り組んでいます。学年図書委員会の取組でもあり、図書委員が赤と白の旗をもって真剣にジャッジする姿も素敵でした。1年生の先生方をはじめ私や教頭先生も上の句を読む機会を与えてい

ただきました。先生方それぞれの個性的な読み方でしたが、みな生徒と同じで真剣そのものです。吟者の声に集中するシーンとした時間の後、ため息や歓声があちこちから沸き上がります。審判をしている図書委員は担当している対戦の結果を素早く判断し、旗を上げます。4人の審判がすべて白旗を上げると、次の歌が詠まれます。すぐにまた、会場はシーンと静まります。

百人一首は競技としても面白いのですが、一つ一つの歌の意味を知るともっと興味がわきます。その一部を紹介しましょう。



### 百人一首の和歌に秘められた物語・・・

「歌合」(うたあわせ)とは、左右二つに分かれた貴族が、互いに持ち寄った和歌の優劣を競い合う宴のことです。平安時代に500回ぐらい行われているこうした歌合の中でも、960年に村上天皇が開催した天徳内裏歌合(てんとくだいらうたあわせ)は、もっとも華やかな宴として後々まで語り継がれました。

歌合に勝つために両チームは優れた歌人を揃えようとしています。天徳内裏歌合では壬生忠見(みぶのただみ)と平兼盛(たいらのかねもり)を抜擢します。この二人の歌合はそれぞれ名歌を生み、和歌史上最大の名勝負となりました。

【左】壬生忠見「恋すてふ我が名はまだき立ちにけり 人知れずこそ思ひそめしか」

【右】平兼盛「忍ぶれど色にいでけり我が恋は ものや思ふと人の問ふまで」

双方とも屈指の名歌であり、判定役の左大臣・藤原実頼は勝敗を定めかねていましたが、村上天皇が御簾(みす:すだれのこど)の中で右の歌を吟じたことで、最後の勝負は右(平兼盛)の勝利に終わりました。

最後の大会で敗れた壬生忠見は拒食症になって他界。一方の平兼盛はこれを契機に出世し、また歌合の常連としても80歳過ぎまで活躍しました。